

「現実大肯定」の気構え

上 廣 哲 治

「朝起会に集うと、不思議に明るい気持ちになるんです。きっと、倫理実践の喜びに満ちた空気が、私を仕合わせな気持ちにさせてくれるからでしょう」。ある会友さんの言葉が忘れられません。

朝起会には、確かに仕合わせな空気が流れています。集われた方たちは、皆さん明るく元気で、さすがにいい表情をされています。それは会友の皆さんが、楽しく生き生きと、笑顔で倫理を実践されている何よりの証拠です。

では、会友の方たちは、最初からなんの屈託もなく、明るく仕合わせに暮らしてきたのでしょうか。そんなことはありません。この世に生きる人はだれも、程度の差こそあれ、何かしらのストレスや困難を抱えて暮らしています。

ですから、朝起会に集われる会友さんの表情が明るいのは、最初からストレスや困難がなかったからではなく、それらと正面から向き合い、わが会の教えを日々実践することで、その困難を乗り越えてこられたからです。だから仕合わせに暮らしているのです。あなたの会場の朝起会に仕合わせな空気が流

れているのは、皆さんの実践努力の賜物、わが会の教えの正しさの証なのです。

では、仕合わせになるには、どのような実践をすればよいのでしょうか。そのとき大きな力を発揮するのが、「現実大肯定」の気構えです。そこで今月は「現実大肯定」について考えてみます。「実践倫理講座・天の巻」には、こうあります。

—— 現実には、快い現実もあれば苦痛をともなう現実もあります。そうしたすべての現実を「現実」として、そのまま「素直に受け容れること」、すべてをそのまま「認知」し「受容」すること。それが日常生活での現実「大肯定」の態度です——

たとえ現実が自分に受け容れがたいものであっても、その現実をいったんあるがままに認めて受け容れる、ということなのです。そうすれば、なすべき実践も進むべき道も明らかになる、ということなのです。目の前の現実を鵜呑みにして、唯々諾々として生きることではありません。現実から目を背けて拒否したり、批判したりしているだけでは、解決の道は見つかりません。その意味で、「現実大肯定」の姿勢を貫くことは、社会に生きるうえでもっとも基本的な実践といえるのです。

水彩で草花を描き、それに詩を添えた「詩画」の作品で知られる星野富弘さんという画家がいます。不慮の事故で手足の自由を失ったため、彼は口にくわえた絵筆で絵や文字をかきます。首から下はまったく動かすことができず、感覚もないそうです。

中学校の体育の教師だった星野さんは、ある日、体育館から聞こえてくる生徒たちの歓声に誘われて、自分も体を動かしてみたくまりました。高校、大学と器械体操に親しんだ星野さんは、鉄棒や平行棒の難しい技もマットの上での宙返りも、お手のものでした。ところがその日に限って、頭からマット

に落ちてしまったのです。一命は取り留めたものの、首の神経を傷めて手足の自由は失われました。

星野さんは、回復を願って長い入院生活を送りましたが、いつこうに体は動くようになりません。体を動かすことが得意で体育の教師になったのです。病床に臥せたままの現実を受け容れがたく、将来について悩みました。

そんなとき、星野さんはふと、小学生の頃、川で溺れかけたときのことを思い出しました。ガキ大将たちについて、近くの渡良瀬川に泳ぎに行ったときのことです。年長の子どもたちは対岸に泳いで渡ることができましたが、まだ犬かきぐらいしかできない星野少年は、流れの速い川の真ん中を避けて岸の近くで泳いでいたそうです。ところが、ちょっとしたはずみで足をとられ、流されてしまったのです。岸に戻ろうと必死に手足をバタつかせますが、うまくいきません。

そのとき、青い淵となっているのは川のごく一部で、ほとんどは人の膝くらいの深さだったことに思い至ったのです。無理に岸に戻ろうとするより、このまま流れに身をまかせよう。少しして川底を足で探ると、案の定、そこはもう腿にも達しない深さでした。星野少年は溺れずにすんだのです。

病床の星野さんは、この少年時代の体験を思い出し、手足が動かないと苦しむ今の自分が、流れに逆らって必死にもがく子どもときの自分に重なったのです。そして考えました。なにも元の状態に戻ろうとしなくていいのではないか、今できることをすればいいのだ、と。星野さんは、手足を動かせないという現実を認め、受け容れたのです。

そのときの気持ち、星野さんは「渡良瀬川」と題したエッセイに書いています。「その頃から、私を支配していた闘病という意識が少しずつすれていったように思っている。歩けない足と動かない手と向き合って、歯を食いしばりながら一日一日を送るのではなく、むしろ動かないからだから、教えられながら生活しようという気持ちになったのである」

この星野さんの体験こそ、究極の「現実大肯定」といえるのではないでしようか。助かりたい、何としても岸に戻るのだという焦りが、いつときあるがままの現実を見えなくしました。しかしその焦りから脱すると、日頃の現実が姿を現したのです。流れに身をまかせるのが、最善の道だったのです。

生きていれば、思いも寄らないことが次々に起こります。認めがたい、逃げだしたくなるようなことにも遭遇します。そうしたとき、腹をくくって事態を甘受する。つまり、恐れず、逃げず、逆らわずに、目の前の現実をいったん素直に受け容れるのです。そうしてその現実を、わが会の教えを實踐することで、善い方向に変えてゆくのです。これが「現実大肯定」の気構えです。

その構えは、言い換えれば、直面する問題に無心に取り組むことでもあります。我に囚われた心から脱して、素直な心で事に向き合うことです。「現実肯定」でなく「現実大肯定」と「大」が付いているのは、森羅万象、この世の現実を丸ごと根本的に認める、といった意味が込められているのです。

この「現実大肯定」の姿勢を表しているのが、『年頭之辞』にあった「はい」「ありがとう」「ごめんなさい」の實踐です。□先だけではない、心からの「はい」と「ありがとう」、そして「ごめんなさい」には、否定や批判の気持ちがありません。現実を素直に丸ごと受け容れ、肯定する言葉なのです。

「現実大肯定」の気構えと、「はい」「ありがとう」「ごめんなさい」の實踐。これは、現実に対してたいへん積極的、自律的な姿勢で、「随所に主となる」實踐の第一歩ともいえます。「實踐」は「心」に従うものなのです。